

長期不登校経験を持つ高校生への社会参加支援

—自己イメージ及び時間的展望を観点として—

14005PCM 竹本 美穂

I. 問題

不登校の背景をめぐる議論：不登校の背景についての議論を歴史的に見ると、最初に本人や家族の病理であるとされ、その後学校原因論が台頭し、最後に社会原因説が出てきたという流れを辿る。現在では、本人や家族、学校、社会の病理が複雑に絡み合っていると認識されることが一般的になってきた(市川,2014)。

不登校児童・生徒の支援は、それぞれに異なっていると推察される背景要因を導き出し、個別に柔軟な対応を行っていくことが望まれる。

不登校の長期化とその背景病理：杉山(2007, 2009)は、長期化する不登校児童・生徒の多くの背景病理として以下の3つを挙げている。①統合失調症を中心とする精神病、②スキゾイドパーソナリティの low function を中心とするパーソナリティ障害(前思春期まではアタッチメント障害、以下 AD)、③自閉症(以下 ASD)をベースとした対人関係での傷つきによるフラッシュバック、の3群である。上記の様に背景病理が違えば、対応方法はそれぞれに応じたものである必要があるが、これらの鑑別には困難があると言われている。

不登校生徒の社会参加不安と自己イメージ：自己の形成と、他者とのかかわりや社会参加は切り離すことのできないものであり、不登校児童・生徒それぞれの自己の形成状態と、社会参加不安の質には関連性があると考えられる。先行研究では、不登校生徒の内的体験の特性、特にその中核にある自己イメージに着目することで、ASD と AD の鑑別が可能であることが示唆されている(花田,2012; 大久保,2013)。自己イメージとは“自己の基盤となる様々な要素、まとめると、自身を取り巻く世界との距離や関係性、その全てを包含した概念”である(木村・後藤, 2012)。自己イメージに着目することで

個々の内的体験内容を明らかにし、社会参加不安の質の違いの把握が可能となる。

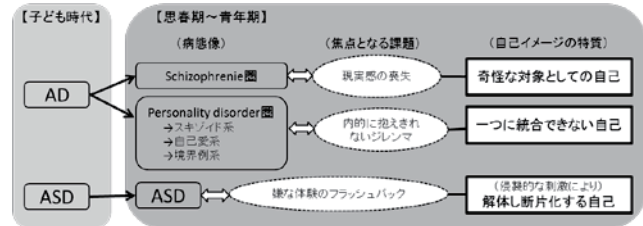


図1 病理と自己イメージの関係

不登校と時間的展望：社会参加にあたって必要となる、近い将来の自分についてリアリティのあるイメージが持てているかを、時間的展望によって確認する。時間的展望は“ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体”(Lewin,1951)と定義され、個人が心理的な過去・現在・未来をどのように位置づけているのか、そしてそれらをいかに関連づけ意味づけて捉えているかを示す概念であるとされる。この「時間的展望」と「自己・自我」の関連性については、これまでも多くの研究者が言及しており、時間的展望の開かれ方と自我の発達とは関連が深いと示唆されている。本研究では「自己・自我」を、投映された「自己イメージ」として表現してもらい、時間的展望との関連を検討する。

II. 目的

本研究の目的は、以下の2点である。①内的体験と自己イメージ、時間的展望を検討することで、不登校生徒の社会参加不安の状態把握を試みる。仮説として、彼らの持つ自己イメージと、自己を作るために必要とされる時間的展望の開かれ方の間には、相互作用があるのではないかと考えられる。②不登校生徒への支援策を考える上で、時間的展望の側面からのアプローチの可能性を考察する。

III. 方法

調査協力者：不登校経験を持つ中高生が在籍す

る私立 S 学園の高校 3 年生 5 名。

手続き：心理検査として、バウム・テストとロールシャッハ・テストを実施し、病態水準の臨床心理的アセスメント、自我境界と自我防衛の状況、自己イメージの把握を行った。その上で、時間的展望を把握するために TAT を実施した。学園保有の成育歴や行動観察記録も参考にした。

IV. 事例

事例 1 (男性, 17 歳)：時間的展望は開かれず断ち切られている。自我境界の弱さがあり、自我解体の危機や自我漏洩感を感じている。

事例 2 (女性, 17 歳)：自己イメージが年齢相応に育っていない状態で、時間的展望が浅く都合の良いものになっている。

事例 3 (男性, 18 歳)：時間的展望は開かれておらず、リアリティに乏しい未来からは、不安感が感じられる。スキゾイド傾向とジェンダーをめぐるジレンマの中にあり、自己イメージを作ることに苦心している。

事例 4 (男性, 17 歳)：未来へのリアリティの無さと、存在実感の欠如が認められる。自己が育ってない現状があり、情緒性と身体性に自我親和感ができていない。

事例 5 (男性, 18 歳)：バウム・テストとロールシャッハ・テストでアセスメントされた自己イメージと、TAT の結果との間に関連性が見られない。これは、両検査の間にあった就職試験合格という現実を、肯定的な自己イメージとして取り入れられたことや、過去の捉え直しができたことが要因として考えられる。

V. 考察

社会参加不安の背景要因—時間的展望との関連において—

(1)事例 1・事例 2 (無力感の大きさから身動きできないでいる場合)：自己効力感が未成熟で、自己存在感の否定がなされており、アパシー親和性が高い。自我漏洩の不安も持ち、それが自我境界の守りの弱さとも関連している。必要とされる自己の確認が、基本的な心の課題となる。

(2)事例 3・事例 4 (近い将来の自分のイメージにリアリティが持てない場合)：自己断片化を避けるために作られた誇大自己を持て余している

ことや、過去のやり直しについての志向性の強さが読み取れる。彼らの持つ内的混乱は、ジェンダーをめぐる自己課題の拡散と曖昧化、自己断片化の不安と言える。現実生活者としての感覚を取り戻すことが取り組み課題の基本となる。

(3)事例 5 (時間的展望がある場合)：解決可能性が内在化され、生活者としてのリアリティ、自分が主人公である感覚を確保できたことが推察される。今後、現在の自己イメージが不安定化しないように見守る必要性は残っている。

これらの事例への考えられる支援

(1)現在の自己というイメージの明確化：今の生活場面で実現できている肯定的なイメージで捉えられる自己を作ることが有効だろう。

(2)身体性と情緒性の獲得：彼らは“素直な感情を曖昧化させ遠ざけることによって生活感もしくは生きていく実感が希薄になり、同時に身体性も希薄になる” (後藤, 2006) 状態と言えよう。“安定した枠組みと、父性によって守られ母性によって支えられている感覚” (後藤, 2006) を得ることで、身体性を回復し、自分の情緒を受け入れる姿勢ができるのではないだろうか。

(3)なりたい自分を語る言葉の獲得：浅川 (2008) は目標の必要性について“目標とは、高校生が混沌とした彼ら彼女らの自己意識の中に、目標 (未来) を起点とした時間的秩序を構築するためのアンカーとなっている可能性がある。存在する場合としない場合で、自己意識の在り方が変わってくる”と述べている。守屋 (1979,1988) は“時間的展望は、人間が苦悩から努力へと変化する契機を作る”と表現している。展望が開かれる段階まで自我が発達すると、立ち止まっている状態から目標へ向かって進もうとする状態へと適応が促進される。

(4)なりたい自分となり得る自分の統合：未来に対して理想や幻想だけを抱くのではなく、現実的視点を併せ持つことが重要となってくる。そのような状態になって初めて、現在と未来の時間的展望を現実味を持ったものとして確立することができるのではないだろうか。

以上の様な試みが『実現可能な近い将来』についての時間的展望の獲得へとつながっていく。